

栃木県栗山村土呂部集落における生業の変遷と 資源利用の空間的变化 — ブナ帯山村の一事例 —

斎藤 功・山本 充*

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| I はじめに | IV 共有地・私有林利用の変化 |
| II 集落の成立と集落構成の変化 | IV-1 採草地の残存 |
| II-1 集落の成立 | IV-2 共有地の分割と私有林の拡大 |
| II-2 集落構成施設の変化 | V 国有林利用の低下と農外就労の増大 |
| III 耕域利用の変化 | V-1 伝統的国有林利用とその残存形態 |
| III-1 伝統的自給農業 | V-2 牧場の設置と農外就労の増大 |
| III-2 ダイコン栽培の導入と和牛飼育の発展 | VI 資源利用と生活空間の変化—むすびにかえて— |

I はじめに

農耕地に適する平坦地が少ない山村においては、食糧を生産する耕域ばかりでなく、そこを取り巻く山域の多様な資源利用が集落存続の不可欠の条件であった。このことは、山林の動・植物資源に大きく依拠した木地師（渡辺，1977）、狩猟（千葉，1969）、製炭（福宿，1969）、林業集落（藤田，1981）のみではなく、山村全体、とくに自然環境の厳しいブナ帯山村（市川・斎藤，1979）に妥当するものでろう。

しかし、山村における生業とその変化についての分析はしても、それを山林資源の空間的利用に関連させて考察した事例（池谷，1984；中島，1986；Penz，1984）は、多いとはいえない。本稿は生業の変化が山林の動・植物資源の利用と空間的にどのようにかわりを持っていったかを栃木県栗山村土呂部を事例に考察しようとするものである。土呂部は栗山村の大字の一つであり、江戸時代からの藩政村であった。標高920mに位置する土呂部は周囲をミズナラ、ブナ・ミズナラ、ブナ林に囲まれた（文化庁，1972）、いわゆるブナ帯の山村といえることができる。鬼怒川の源流部をなす栗山村においても土呂部はその支流の土呂部川に沿う小盆地に立地しているため、鬼怒川本流河畔にある川俣、野門、上栗山、黒部、日蔭、日向の集落とは趣を異にする。

なお、本稿は1983・84年の現在の調査にもとづいて執筆したものであるが、山本のドイツ留学・学位論文の作成、斎藤のブラジル調査等により、公表が遅れたものである。

*埼玉大学教養学部地理学研究室

Ⅱ 集落の成立と集落構成の変化

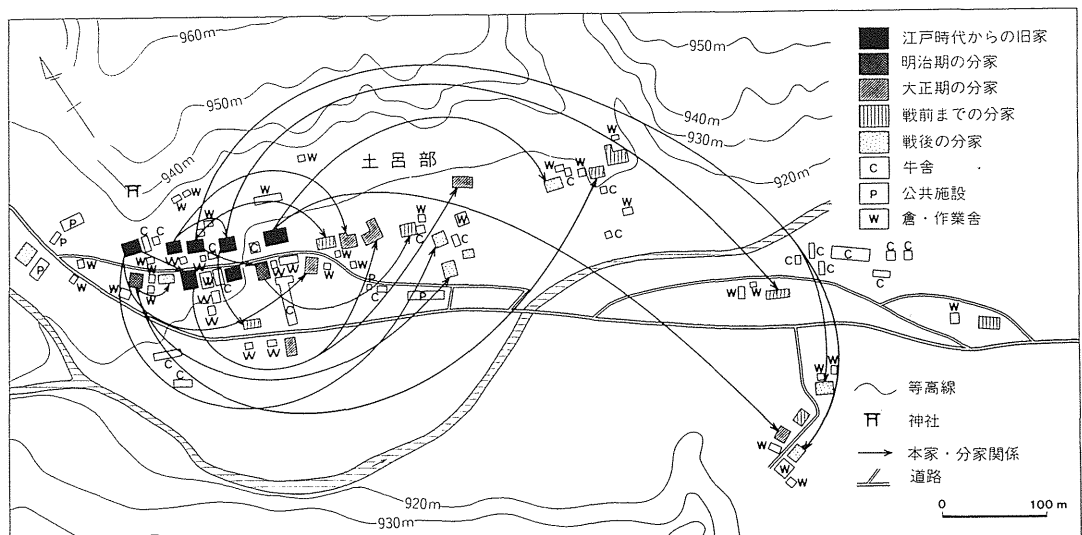
Ⅱ-1 集落の成立

土呂部の集落は、江戸時代の中期には36軒を数え、現在地より下流の下土呂部に成立していた。しかし、度重なる凶作等のためある者は越後へ流亡し、現在地に残ったのは7戸のみであったという¹⁾。この草分けの7戸は山の神を祀る滝王神社前のイダイラに立地している。明治期までに2戸、大正期に6戸分家し、土呂部の集落規模は15戸となった。これらの新戸は一般に草分けの7戸より下流側に立地し、その傾向は昭和前期に分家した7戸にも妥当する(第1図)。

海拔920mに位置し、初霜が9月末日、晩霜が6月中旬まである高冷地の土呂部では、東北地方のように凶作に備え各戸ヒエやアワの食糧を1年分貯蔵する慣習が存在した。事実、草分けの一人神山弥一宅では現在でもトチの実が屋根裏に貯蔵されている。また、部落内への分家は2戸までという不文律が戦前まで存在したという。それにもかかわらず、戦前22戸となったのは、土呂部の本家・分家20戸に加え、土地の娘と結婚した製炭業者が2戸住みついたからである。さらに、戦後の昭和30年頃までに4戸が分家し、現在土呂部はその後の分家を加え、30戸の集落となっている。

Ⅱ-2 集落構成施設の変化

土呂部の伝統的民家は茅葺直屋で、ほとんどの旧家は馬を2-3頭飼育できる内廐を持っていた。囲炉裏は生活の中心で、土間は夜なべ仕事等をするため広くとってあった。ヒエとアワとオオムギが主食であったので、囲炉裏に懸けた鍋で煮炊きをした。また、ヒエやアワは屋根裏や板倉に貯蔵された。板倉は集団ではなかったが、桧枝岐村のように火災からの類焼を防ぐため(田中館・山口, 1936),



第1図：栗山村土呂部の集落構成
(現地調査と聞き取りにより作成)

母屋から若干離れたところに建てられていた。また、土間にはヒエやアワを精白する唐臼が設置され、集落内にはバッテリー（原始的水力臼）も3ヶ所存在し、共同で利用された。

内厩では荷駄の運搬に使われた牝馬が大事に飼育されていた。それは、馬が後述する曲物の素地であるモミの薄板、日光膳の素地となる栗板、トチの木鉢、木炭を運ぶのに欠かせないものであったからである。さらに、土間には味噌玉を造る際、ダイズを煮るため使われたハナエガマ（常設大釜）が設置されていた。馬に餌をやるときにもこの大釜で常時煮えたっていた湯を通してから給餌された。しかし、戦後の1966年川俣ダムの造成にともない黒部発電所の調整池として土呂部ダムが建設された。その際、水田のあった下土呂部まで車道がついたので、水田を所有する5軒を除き馬の必要性がなくなり、内厩は廃止され物置や部屋に改造された。このように茅葺直屋、板倉からなる家屋構成は若干の納屋を加えながら江戸時代から1960年頃まで変わらなかった。

なお、ダイコンの連作障害を防ぐため堆厩肥を投入する目的で黒毛和種が導入された時は、居住生活の近代化が進んでいたため、簡単な牛小屋を建てる外厩に変化した。また、食糧事情の好転は、ヒエやアワを貯蔵した板倉を形骸化させた。さらに、和牛の多頭育化により牛小屋が耕域に設立されるようになった。かつての茅葺直屋は、トタンをかぶせた屋根に変わり、あるいはダイコン、和牛、農外就労で蓄積した資本を基盤に瓦葺に新築された。また、民宿、つり堀、土建業など4軒が耕域に新築され、新しい集落景観となった。一方、石油、プロパンガスの普及と台所の改造は、雑木を焚く囲炉裏での煮炊きを消失させた。しかし、囲炉裏に薪ストーブが置かれ、今でも囲炉裏端が団欒の中心になっている農家も多い。

Ⅲ 耕域利用の変化

Ⅲ-1 伝統的自給農業

土呂部の耕域は、集落の周囲と土呂部川の兩岸の氾濫原および集落背後の段丘面に広がる。ここでは主食であったヒエ、アワ、オオムギ、ソバが栽培された。これらの作物の種子は、醗酵により地中温度を高めるため、北上山地同様（市川、1984）、木灰、尿尿、馬糞を混ぜた水に解き、直播された。アワはヒエと同じ畝に混播されたが、それは稈の丈夫なアワがヒエの倒伏を防ぐからであった。アワとヒエは5月28日頃オオムギの間に播種され、秋の彼岸（9月24日頃）に収穫された。その稈は馬の重要な飼料であった。ヒエの収穫後、ムギが播種され、6月下旬に収穫された。バレイショはムギの跡地にヒエより一週間位早く播種されたが、収穫は遅れ10月20日頃であった。というのはバレイショの間作として7月20頃ソバが播種され10月1日頃収穫されたからである。このほか、ムギの跡にはダイズ・アズキが油料作物であるジュウネ（荏胡麻）等とともに栽培された。したがって、各耕地はバレイショ-夏ソバ-ヒエ-オオムギ-秋ソバというように、3年5作が基本的な作付体系であった。

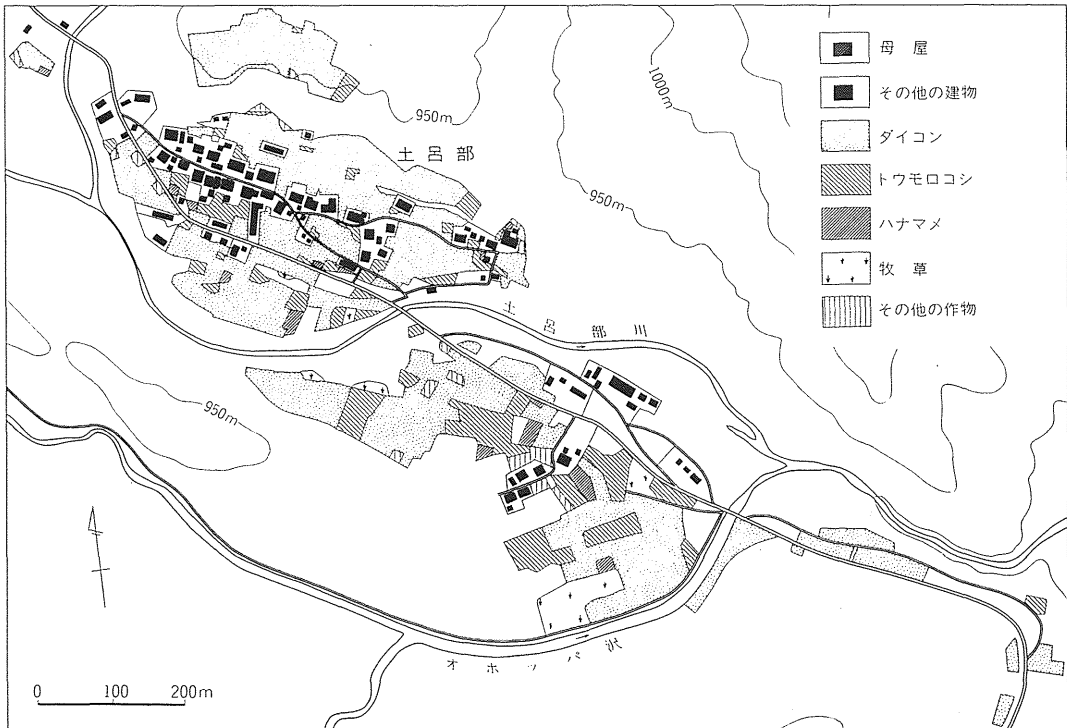
一方、栗山村唯一の水田は、下土呂部にあった。その面積は最盛期で2ha強で、5軒によって所有されていたが、田植えは部落総出で行われた。水温が低いから、反収は札幌早生で1.0-1.5俵、戦後の藤坂五号、トモエマサリで3.5-4.0俵であった。稲は、たとえ収量が少なくても、稲が作れると

いう安心感を与える意味で、および稲稈が馬の粗飼料となるので重要であった。ところがその後、和牛頭数の増大につれ、1970年頃から水田は牧草地に変わった。現在、かつての水田は牧草地のほか、ニジマス、ヤマメ、イワナの養魚池となっている。

養蚕も年1回8月に収繭されるものであったが、畦桑や山桑を使い母屋で行われた。畦桑は晩霜の害を防ぐため、立通し（木桑）に育てられた。屑繭を紡いだ生糸で織られた衣類に加え、大麻が栽培され、普段着、山着に加工された。焼畑農業は明治の中頃まで行われたといわれるが、イラクサ、オバタケヤマ（麻畑山）、ハタザワの小字名は、かつてそこで麻が栽培されていたことを示すものであろう。以上のような自給農業+養蚕は東北日本においても山村の基本的枠組みであり、本地域でも1955（昭和30）年頃まで続いた。

Ⅲ-2 ダイコン栽培の導入と和牛飼育の発展

第2図は、1983年の盛夏、8月7日現在の耕域の土地利用を示したものである。それによるとダイコン、トウモロコシが卓越していたが、パレイシヨ、アズキ、ハナマメ、家庭菜園も認められた。家庭菜園にはネギ、キャベツ、ナス、キュウリ、カボチャ、サトイモ等が栽培されていた。圧倒的面積を占める夏ダイコンは、一般に6月1日-7月1日の1ヶ月にわたって播種され、7月25日-8月25日に収穫される（写真1）。農家で包装されたダイコンは日光高原野菜出荷組合を通じて東京市場に



第2図：1983年8月の土地利用
（1983年8月7日の現地調査により作成）

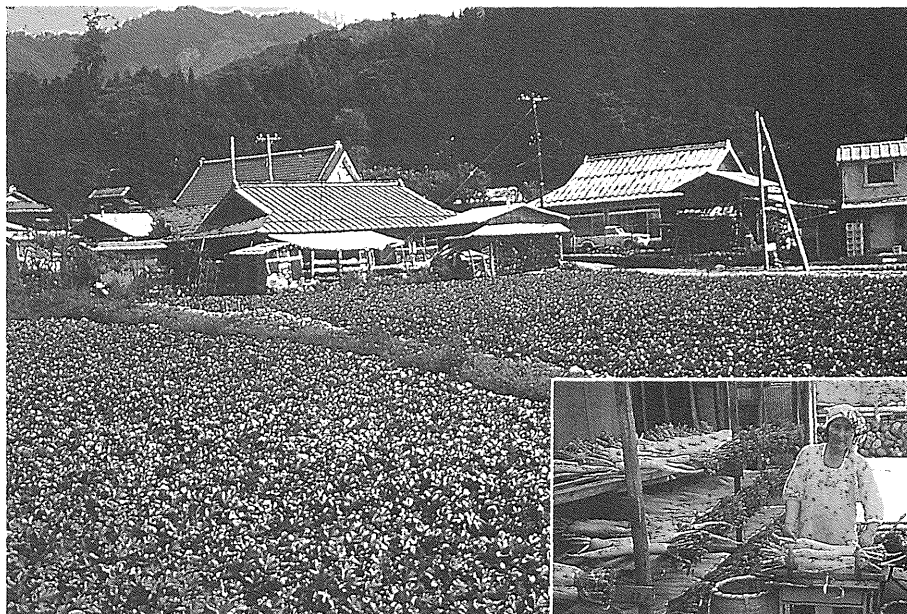


写真1：夏ダイコンの栽培景観と出荷包装（カット）

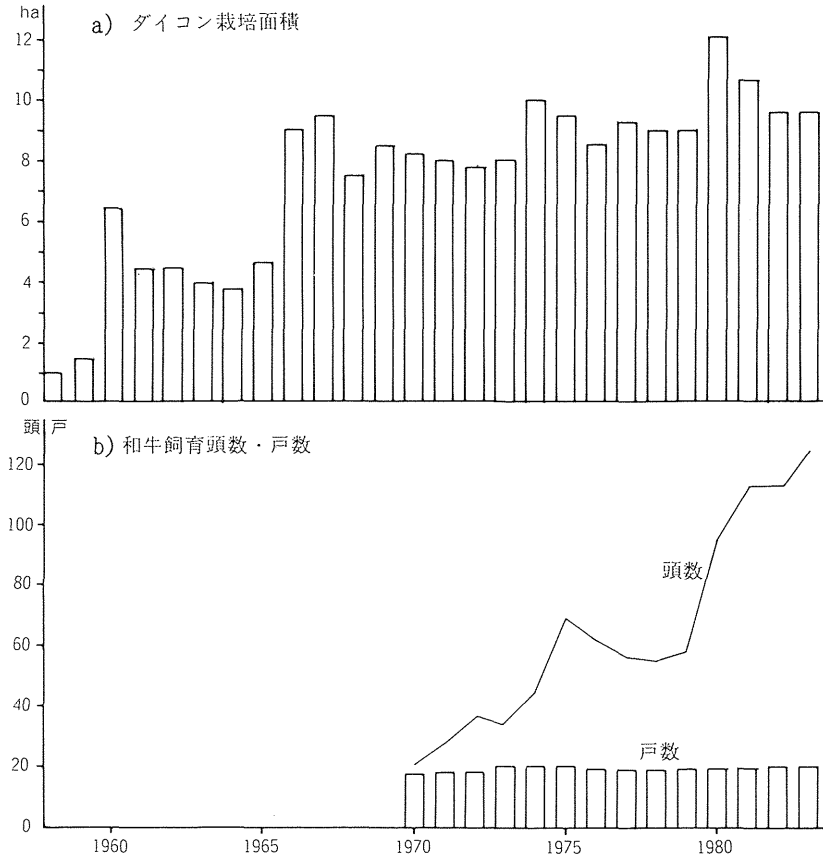
1975年9月23日（1978年8月2日）

出荷されるが、栽培組合に入っていない零細な農家4軒は個人で直接、今市市場に出荷している。

このような夏ダイコンは、日光戦場ヶ原、鶏頂山開拓の影響（斎藤，1981a）と農業改良普及所の指導で栗山村に1952年導入された（日光高原野菜生産出荷協議会，1977）。当初，表栗山の日向，日蔭集落，湯西川地区に入り，土呂部に導入されたのは1966年頃であった。第3図aは表栗山のダイコンの栽培面積の推移を示したものである。1967年以降は表栗山のうち，土呂部が1977年75.6%，1983年90.2%と7－9割を占めてきたので，それはほぼ土呂部の夏ダイコン栽培面積の推移を示したものとみることができる。ダイコンの栽培面積は，年による変動は大きいものの，長期的にみれば微増傾向にあるといえよう。

ダイコンの連作障害を防ぐため，夏ダイコンの収穫終了後，禾本科のエンバクが8月中旬から9月上旬にかけて播種される。エンバクはダイコンの腐乱病，萎黄病の発生を抑制するばかりでなく，和牛の優れた飼料になる。すなわち，エンバクは9月初旬に牧場から降ろされた和牛の青刈飼料，冬季飼料として供給される。その量は反当3.8トンに上るといふ。

ダイコン栽培の進展とともに土呂部では第3図bに示したように，和牛飼育が盛んになった。和牛は，夏ダイコンの産地蛭ヶ野高原のように（斎藤，1982），産犢用の黒毛和種であり，ダイコン栽培との労働力競合を避けるため，5月28日から11月13日頃まで村営土呂部牧場，上栗山牧場，三沢原牧場および組合営土呂部牧場に放牧される。一般に，犢は3－4月に生まれるので，種牝牛とともに放牧され，翌年の2月に肉牛の素牛として矢板市の牛市場で糶にかけられる。したがって，第3図bに示した和牛数は，ほぼ母牛の頭数と考えても差し支えない。また，村営牧場には村有の種牝牛が放牧され，放牧中に交配される。なお，飼育されている牛は中国山地産の蔓牛²⁾の系統が多い。



第3図：土呂部におけるダイコン栽培面積と和牛飼育頭数の推移
(栗山村役場資料により作成)

黒毛和種の素牛は、11月15日から5月27日まで舎飼いされる。この間の堆厩肥はダイコン畑に投入され、地力向上に寄与している。つまり、夏ダイコンー青刈エンバクという耕域の2毛作は、産犢用和牛飼育と有機的に結合し、優れた農業経営を生みだしているのである。近年、和牛の多頭育化にともない、一貫生産で肥育を行う農家も3軒出現し、畑地の中に畜舎が建造され、新しい山村景観になりつつある。

耕域利用は農家の経済生活と密接に結びついているものであるが、土呂部において特徴的なことは第1表に示したように、土地所有面積、ダイコン栽培面積、和牛飼育頭数の階梯が農林家の成立年代と対応することである。すなわち、草分けの7戸、明治期に成立した2戸の計9戸は、すべてダイコンを0.6ha以上栽培し、全戸数の栽培面積9.73haの67.3%、和牛頭数132頭の62.8%を占めているのに対し、大正、昭和前期に成立した9戸は脱農化した4戸を除き、ダイコン0.3-0.4ha、和牛飼育頭数4-5頭平均である。また、戦後に成立した8戸のうち農業を営んでいるのは3戸のみで、ダイコン0.1ha、和牛2-3頭という段階にある。土呂部では以上のように、村落の社会構造が農業経営規模に見事に反映されているといえよう。

第1表 栗山村土呂部における農家の社会・経済状況

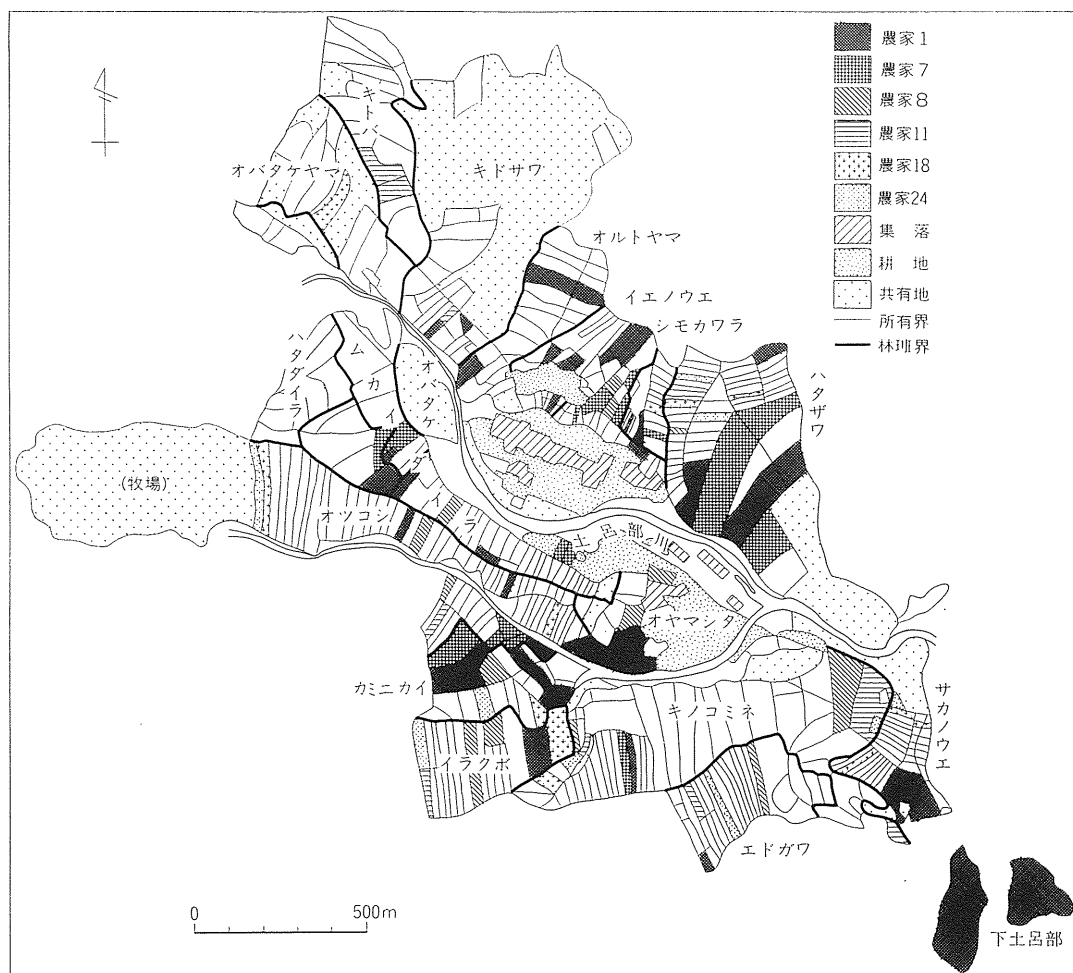
農家 類型	農家 番号	分家の 数 ¹⁾ 戸	耕地 面積 ²⁾ a	ダイコン 栽培面積 ¹⁾ a	牛の 数 ¹⁾ 頭	採草地 面積 ^{1・3)} a	山林 面積 ³⁾ a	家族の就業状態 ^{1・2)}					計	
								農 業	公 務	土 建	自 営	そ 他		子 供
江 戸 時 か 代 ら の 旧 家	1	3	228	85	6	316[110]	1559		1	1		1		3
	2	2	151	85	16	178	754	1		1		1		3
	3	2	107	80	20	163	831	2	1					3
	4	2	83	65	3	190	764			2			3	5
	5	—	74	60	2	255[45]	777			2				2
	6	1	67	65	15	179	694	1	2	1			1	5
	7	4	55	85	1	444	742	2						2
明 治 ・ 大 正 期 の 分 家	8	1	47	60	17	182	496	1	1	1			1	4
	9	3	43	70	3	110	435			2				2
	10	—	35	30	2	72	388	1	1	1				3
	11	—	31	40	4	45	293		2	2			2	6
	12	—	25	40	3	153	356		1	2				3
	13	—	14	40	12	100	369		1	2				3
	14	—	0	—	—	—	219		1	1				2
	15	—	0	—	—	—	[45]	204					1	1
戦 前 ま で の 分 家	16	—	28	20	3	(45)	237	1	2				1	4
	17	—	13	60	12	110	339			2		1	1	4
	18	—	12	30	4	45	278	1	2					3
	19	—	7	5	2	13	217	1	3					4
	20	—	0	—	—	—	283	1		2				3
	21	—	0	15	—	—	224	2				1		3
	22	—	0	—	—	—	212	3	1					4
戦 後 の 独 立 世 帯	23	—	0	—	—	—	211			2		2	2	6
	24	—	0	18	2	45	226			2				2
	25	—	0	10	2	(45)	194			2		2	1	5
	26	—	0	—	—	—	198	1	1			1	2	5
	27	—	0	10	3	(110)	387			2			1	3
	28	—	0	—	—	—	45			2		1	2	5
	29	—	0	—	—	—	—	1		3				4
	30	—	0	—	—	—	—					1		1

資料：¹⁾聞き取り ²⁾土地台帳による ³⁾森林簿による

Ⅳ 共有地・私有林利用の変化

Ⅳ-1 採草地の残存

大正元年測図の五万分の一地形図によると、土呂部周辺には採草地が今日より広がったことがわかる。すなわち、ハタザワ、キノコミネ、オッコシの採草地も今日より広く、割山となつているエドガワおよびハタダイラ、イラクボも採草地であった。また、現在の村営土呂部牧場（一本松、オオクボ）からキトバ、オバタケヤマまでも採草地・萱場であった。このような広大な採草地が存在したのは、そこが馬の飼料の草刈場・萩刈場であり、茅葺屋根の原料を供給する萱場であり、製炭が導入されてからは炭俵の原料である茅を供給する場所であったからである。このように多様に利用されていた採草地は、1955年頃まで樹木の侵入を防ぐため、火入れが行われ草生が維持された。



第4図：土呂部集落の共有地・私有林の分布
 (森林簿，森林施業図および聞き取りにより作成)

採草地のうち一本松、オオクボは明治初年の林野の官民有区分の際、国有地に編入されたが、慣行として採草地利用が黙認されてきたところである。サカノウエなども庄屋であった家が租税を肩代わりし、共有地として利用されてきたところであるという。火入れ禁止後、現在まで採草地が3ヶ所維持されてきたのは、前述のように畑地に投入する堆肥を造成するため個人採草地が活用されてきたからである。

3ヶ所の採草地のうち、東部のオルトヤマ、ハタザワは草創期の4軒によって所有されており、東南部のキノコミネはほぼ1.1haづつ、昭和初期までに成立した農家12軒によって所有されている（第4図）。かくて、採草地の所有も第1表に示したように最大4.4haから無所有まで、旧家層に厚く新戸に薄いという成立年代を反映した傾斜配分がなされている。この採草地の多寡は、それを1ha以上持っている農家と和牛飼育の規模拡大を行っている農家との一致にみられるように、農業経営と密接に関連している。だから、採草地を持たずに和牛を飼育している農家は、本家等から採草地を借りるなどして全て採草地を利用しているのである。このことは、夏ダイコンの栽培が和牛を通じて採草地と有機的に結びついていることを意味するものであろう。

ところで採草地の草刈りは9月末から10月初めにかけて行われる。採草地にはハギ、チガヤ、ススキ、アザミなどが混じっているので、かつては刃が厚く柄の長い草刈鎌を用いて刈りとられたが、現在では回転歯のついた草刈機を使っている。小束5個でヒトボッチのシマを作り、乾燥させる（写真2）。刈草を束ねる時、ワラビは牛が食べないので取り除く。乾燥した草ボッチは背負って畜舎の近

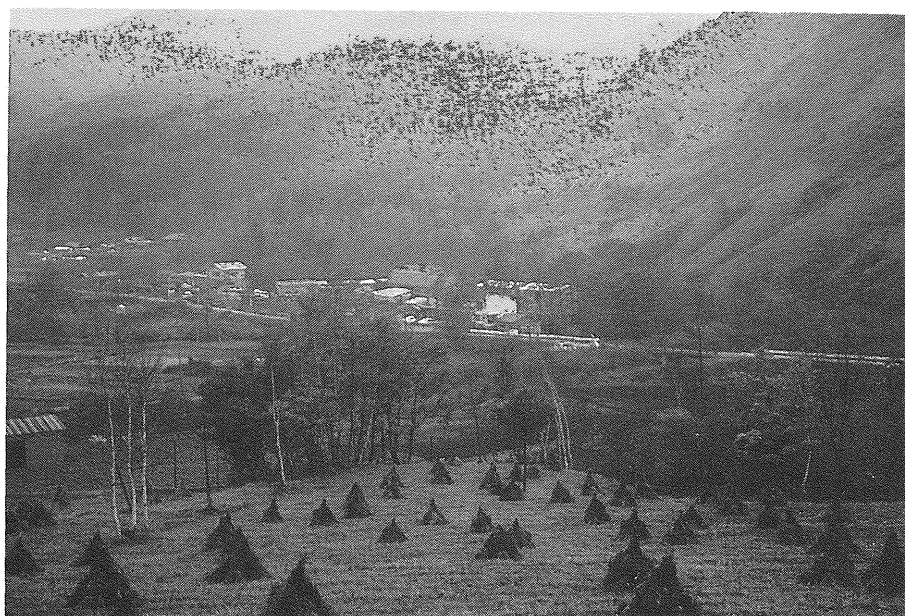


写真2：キノコミネからみた刈草のシマと集落
 割山になっている採草地キノコミネのシマ（ヒトボッチ）と集落の
 遠望（耕地にはダイコンに代わってエンバクが栽培されている）。
 1984年10月初旬

くや道路脇まで運ばれ、40-50 ボッチ積み重ねて保存される。これはクサノと呼ばれるが、それは雪に覆われた冬の半年間の牛の飼料として1頭当たり2つ必要とされるという。和牛の多頭育の進展により採草地の干草だけでは粗飼料が不足するため、畜産農家は10月20日頃から11月中旬にかけて予め頼んでおいた今市、鹿沼方面の農家から稲藁を集めなくてはならない。

Ⅳ-2 共有地の分割と私有林の拡大

森林簿により土呂部の共有地をみると、まず集落の北部キドザワの20.8haが目につく。ついで、集落の入口にあたるハタザワ、サカノウエの6ha、オバタケヤマの共有林が主なものである。これらとともにキトバ、土呂部川に沿ったオバタケの防水林、キノコミネの水芭蕉保護林などが共有地に含まれる。これらの共有地にはカミヤマイチ11等と表記されているように、12名共有地、18名共有地、26名共有地の3種類が存在する。

12名共有地は滝王神社の境内をはじめ、キトバ、オバタケヤマ、キノコミネの水芭蕉自生地にある。この共有者数は、キノコミネ、オッコシの採草地の分画数と同じで、明治期までに成立していた9戸と昭和の初めまでに分家した準旧戸3戸によって所有されている。一方、オバタケ地籍の防水林は18名の共有林であり、ほぼ第二次大戦前までに分家した農家によって所有されている。さらに、26名連記の共有林は新林野法の施行期に、国有林を払い下げたもので、1955年までに成立していた26戸によって共有されている。さらに、森林簿に記載されていないが、オッコシの採草地に西接したオホoppaに16haの共有林がある。このうち11haは1982年から土呂部畜産組合の黒毛和種の放牧場として利用されている。第4図は共有地と採草地を含めた私有林の所有状況を示したものである。農家1は土呂部の庄屋であったので、耕地、採草地の場合と同様、山林も16haと最も多く所有している。農家7は農家1と同様、草分け層に属するが、採草地を含めても農家1の半分にも達しない。それは同家の分家である農家8に林地を分与したことによるものであろう。この農家8は明治期に、農家11は大正期に、農家18は昭和前期に、農家24は戦後に独立したものである。これら農家の山林面積が採草地を含めても独立年代が新しくなるとともに、段階的に減少することがわかる。

この段階的山林所有構造は、共有地の個人への配分が採草地の割山同様、集落の社会構造を反映して行われた結果である。たとえば、エドガワ、キノコミネ、オッコシ、シモガワラ、ハタザワ地籍に共有地的色彩の残る割山私有林が認められる。この割山は前後数回に渡って行われたものであるが、1955年の場合には旧戸(9戸)1.2ha、準旧戸(3戸)0.6ha、分家して20年以上の家(8戸)0.35ha、同10年以内の者(1戸)0.2ha、同7年以内の者(3戸)0.15ha、その他(2戸)0.0813haという割合で分配された。このような傾斜配分はイラクボ、カミニカイ、ムカイダイラ、オルトヤマ、イエノウエ等でもみられる。かくて、採草地を含めた山林所有に大きな差が生じたのである(第1表参照)。

森林は、まとまった面積があるかどうか、作業しやすい近接性のある場所にあるかどうかでその経済的価値が決まる。農家1は道路の近くに私有林を所有するとともに、オッコシの山林を栗山高原観光開発公社のキジ養殖場に、また下土呂部の旧水田60haを養魚場に賃貸しているので、その面積以上の経済的価値を発揮している。一方、山林面積の少ない人は、灌木の生えるままにしておき、たと

え植林しても枝打ちなどの手入れが不十分となる傾向があるので、その利用度に面積以上の格差を生じさせる結果となる。

V 国有林利用の低下と農外就労の増大

V-1 伝統的国有林利用とその残存形態

1) 生活資材の取得

土呂部では集落を取り巻く山々を部落の範囲とみなしている。つまり、前述のように林野の官民有区分が行われた後でも共有地の分割が行われるまで、周囲の山は部落林として意識されてきたのである。一般に、ブナ帯の山村で暮らしてきた人々は、集落の周囲の森林資源を巧みに活用してきたといえる。その第1は民家や農具など生活資材の取得であろう。

民家の内部の柱にはスギ、ヒノキが使われたが、土台、外回りの柱等にはクリがふんだんに使われた。一般に、敷居や梁にはモミが、囲炉裏にはヤマザクラが、床板にはマツが使われたが、大黒柱にはクリのほかネズコが使われることもある。また、鋏や斧等の柄にはねばりのあるミズナラが、天秤棒にはマユミが、馬柵棒にはシラベが用いられた。

馬の端綱等の縄類は、水に強いシナノキの樹皮であんだ級縄が使われ、蓑もシナで作られた(斎藤, 1984)。また、スズタケであんだ後述のサンショオウオ漁の笠を巻いて固定するにはブドウ、タモの皮が、カンジキにはタモで編んだ縄が使われた。このように土呂部の人たちは、木の性質を熟知し、用途に合わせ森林資源を利用してきたのである。これら目的に合った森林資源は、山菜取りや山仕事に行った際、予めあたりをつけておいたものを伐採してくるという。

2) 木工品製造

土呂部の人々は農閑期の12、1、2、3月に集落から4-8km離れた国有林内に小屋掛けして木挽き(コビキ)に従事した。木挽きとは日光膳の素地を作るため、栗材を鋸で挽くことの名詞である。小屋は沢筋の暖かいところを選び、付近の木を伐り丸太のまま建て、屋根はナラを割ったコバ板で葺いた。営林署から払い下げたクリを1尺2寸(36cm)に玉切りし、小屋の周囲に積み重ねたり、水溜りに入れ凍らないようにした。日光膳の素地は6尺(181cm)×9尺(273cm)の小屋内に固定されたりンと呼ぶナラ製の台の上に玉切りしたクリ材を載せ、クサビでしっかり固定した後、鋸で端から1cmの厚さに挽いたものである。挽いた板は小屋の中の柵に並べて囲炉裏の焚き火で乾燥した。厳冬でも小屋内は暖かく肌着一枚で作業をしたが、その労働の激しさ故に1日1升5合の飯を食べたという。

「1尺2寸角は24枚、1尺1寸5分は30枚、1尺は40枚、9寸は48枚、8寸は68枚を1束として荷作りした。これを運ぶのは女の仕事である。小屋から土呂部の各家まではショイハシゴ運び、土呂部から日光に出すには馬の背」で(栃木県教育委員会, 1967, 41)、大笹峠を越えた小休戸まで運んだのである。土呂部の女は馬1頭に4束つけ、2頭引いて上って行ったので、上荷として一回8束運び、峠の下り荷として米、塩、醤油、馬の飼料である藎等を持ち帰った。なお、小休戸で帳場を張った店

は5-6軒あり、土呂部は赤羽家、野門や若間は斎藤家というように取引相手が決まっていた。

この木挽きは江戸時代の末期から1935（昭和10）年頃まで行われたという。それ以前、土呂部でも川俣同様、クロベ、シラビ、トウヒを原料とした曲物の素地を作っていたという。その後、土呂部における木工品生産は、トチ材を使った木鉢生産に変わり、1955年頃まで続いた。1尺6寸（48cm）のトチの木鉢は、ソバウチに最も適していたといわれる。しかし、木挽きがほとんど全戸20戸で行われたのに対し、木鉢の生産は5-6戸、盆の生産は2戸で行われたに過ぎない。これは、多くの人が木挽きに代わって製炭に従事したからである。

3) 木炭生産

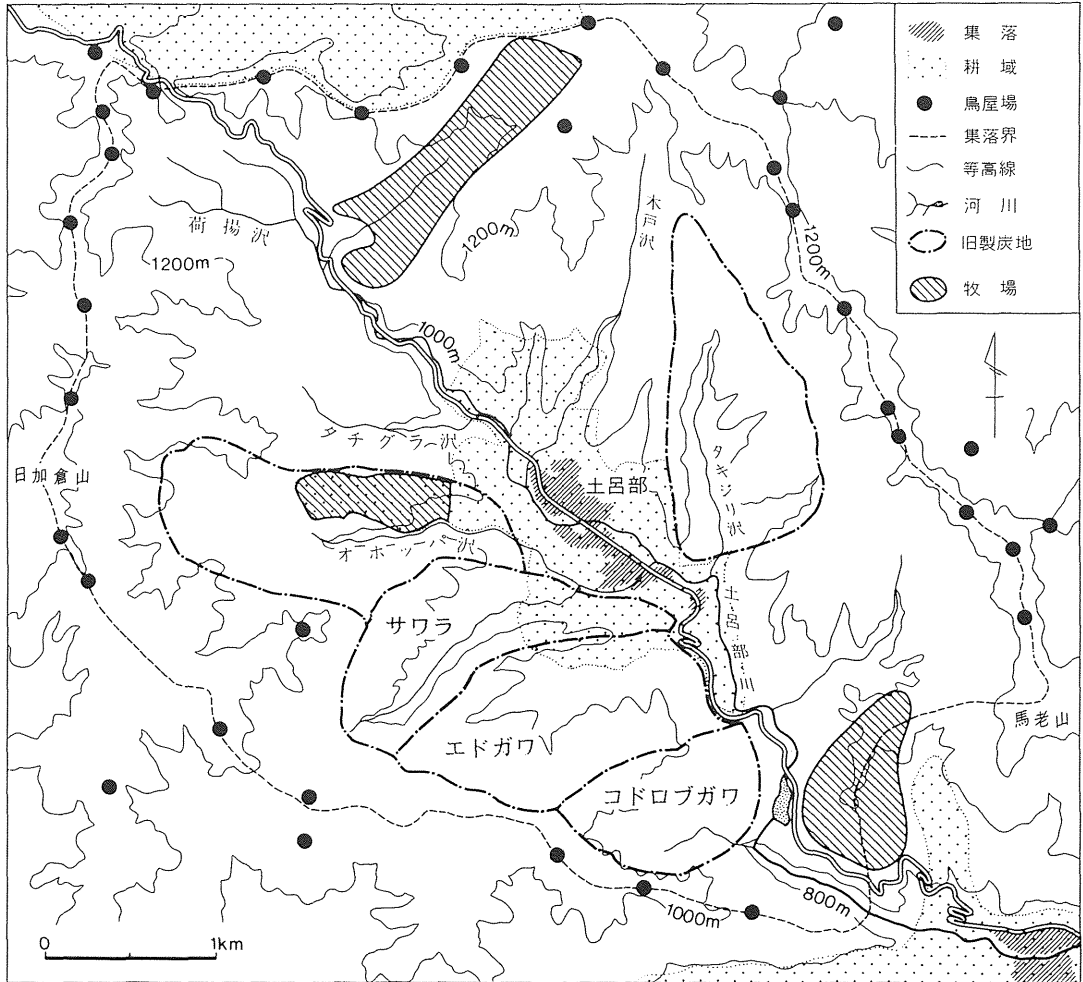
土呂部で木炭生産が始まったのは大正の初めである。当時、土呂部の領域内の国有林が集落全戸で構成された愛林組合に限り払い下げられた。抽選で均等分割されたその雑木林を土呂部の人は、焼子³⁾に歩合制で焼いてもらったという。国有林内の平坦地に設置された炭釜で焼かれた黒炭は、馬を所有していた部落の人によって運び出された。当時、木炭は1俵9貫（34kg）であったので、2頭引きで1頭2俵づつ、1回4俵しか運べなかった。しかし、木炭の検査制度ができた1930年から5貫（19kg）俵に変わったので、1頭に4俵つけて運搬するようになった。この木炭の黒部までの運搬と炭俵編みが土呂部の女の仕事であった。1935年頃から土呂部の人も木炭生産に従事しはじめ、戦時中には全員が製炭に従事するようになった。木炭を生産すれば、米が配給になり、衣料の割り当てがあったからである。なお、製炭の払い下げ地域は、大正期のコドロブガワから昭和前期のエドガワ、サワラ、オホッパザワを経て、戦後集落東部のタキジリサワへと移った（第5図）。

木炭は、1釜で50-60俵（4貫（15kg）俵）焼くことができた。5-6日に1回焼いたので、1ヶ月に200-250俵、年間1,000-1,500俵も生産したという。ちなみに、1960年の世界農林業センサス（林業地域調査）によれば、栗山村には119戸の自営製炭世帯があり、国有林のブナを中心に払い下げを受け、年間6万4,000俵の木炭を生産していたことがわかる。木炭生産の衰退期にあたるこの年度に1,000俵以上焼いたのは、10戸のみで、多くは500-1,000俵であった。

4) ツグミ猟

山村に生きる人々は、多かれ少なかれ山林資源で育まれた野生動物の狩猟を行ってきた。土呂部、日向で江戸時代から行われてきた狩猟は、栗山村の他の集落で行われたクマ、シカ、テン、バンドリ（ムササビ）等の野獣類の狩猟ではなく、主としてツグミ、アトリ等の鳥猟であった。

ツグミは、アトリ、カシラダカ等とともに秋シベリア大陸から能登半島に飛来し、白山麓を経て散開し、日本各地で越冬する渡り鳥である。戦前の農林省統計表の狩猟の部によれば、1930-1940年ツグミは年間160-349万羽捕獲されていた。1940年203.5万羽捕獲されたうち、石川、福井、岐阜、愛知、長野、栃木の諸県が66.4%を占め、主要な狩猟地であった。とくに15.2%、31万羽を捕獲する栃木県が最高であった（市川・斎藤、1984）。こうした鳥猟はヨーロッパのブナ帯においても行われてきた。現ポーランドのダンチッヒ周辺の丘陵および海岸地域では1900年頃までツグミを中心とする鳥猟がな



第5図：土呂部周辺の国有林利用（聞き取りにより作成）

されていた。たとえば、ゾポット（Zoppot）では1820年頃まで、年間約6万羽のツグミが捕獲され、ツグミ祭りが催されていたという⁴⁾（Tolksdorf, 1976）。

栗山村土呂部は日向とともに、ブナ帯のセン、ミズキ、ナナカマド等の実を求めて大挙飛来したツグミの通り道にあっていた。すなわち、本地域に飛来したツグミは群れをなし朝方、東の鶏頂山から西の鬼怒沼方面へ、夕方、逆の方向へ尾根筋の鞍部を通過し、移動する。だから、土呂部では国有林の尾根筋の鞍部に鳥屋場を設け、ツグミを捕獲した。鳥屋場は少なくとも1軒1ヶ所は所有していたため、第5図に示したようにいくつもの鳥屋場が存在した⁵⁾。鳥屋場にはカナバタ、ジュベータ、クビリッタなどタのつく名前がつけられており、田畑同様、借金の担保や売買の対象とさえなっていたという。

大正末にカスミ網が導入される以前、ツグミ猟には、幅1.5-2間、高さ2間の麻糸製のハッキリ網が使用された。この網はツグミを1羽ずつ捕獲するもので、強い風が吹いてもツグミが懸かった場合、

地上に落とせるよう仕掛けられた。幅5 m、高さ3 mのカシミ網が導入された後もツグミ猟には罠が使われた。つまり、10月中旬から11月中旬にかけて本地域に飛来するツグミの群れから雌鳥を呼び寄せるため雄の罠を使ったのである。罠は、本来春の発情期に鳴く声を秋に鳴かせるよう、前年度に捕らえた元気のよい雄鳥を馴致したものである。ツグミ雄鳥は夏の間、活動を抑えるため羽を切り暗い所で飼育し（ネカセルという）、初秋に昼をだんだん長くするよう調節（オコスという）しつつ、米糠、魚粉等を与え栄養をつけ、仲間が飛来する頃よく鳴くよう飼育されたものである。この罠を鳥屋場のカシミ網の下に置くと、仲間の飛来する羽音を聞きつけ、激しく鳴くという。

捕獲したツグミは、かつて20羽1束として販売された。昔から土呂部では、1ヶ月のツグミ猟で半年の生活費は賄える、といわれてきた。十数年前、ツグミはハラワタを抜き、1羽500円で取り引きされた。また、ハラワタは塩、醤油と一緒に漬け込み塩辛にされた。この塩辛は、アユの場合と同様、ウルカと呼ばれ販売された。1猟期の1ヶ月間に、1戸平均1,000-2,000羽捕獲したので、その収入は100万円前後に達したと推定される。

ツグミ猟に加え、アトリ猟がツグミの鳥屋場より遠い国有林内で行われた。それは、アトリがブナの実を求めて飛来したからである。イヌブナの実は12年に1回、シロブナは4-5年に1回の周期で豊作になるといわれるので、その年の秋には大群が飛来する。また、その翌年の春にも雪解けを待ってアトリが飛来した。アトリ猟のカシミ網の目はツグミの半分の5分であったが、ツグミ猟と同じく鳥屋場で行われた。また、その販売価格は、ツグミの5分の1であったという。周知のようにツグミ、アトリ、カシラダカの3種は、1947年の狩猟規則の改正により狩猟対象から外されたが、土呂部では江戸時代からの生業であったので、1980年頃まで密かに行われてきたのである。一般に、山村で暮らしてきた人々は、かれらを取り巻く森林の資源保護を配慮して、常にその山林を利用してきた。というのは、資源の枯渇はかれらの生死を決めるからである。このことは鳥猟にも通じるものであろう。禁猟の全国一斉実施という地域の実情を無視した行政が、山村の過疎化を促進し、山林の荒廃を招かないよう祈るものである。

なお、土呂部でもアトリ猟と同じ国有林区域でサンショオウオ漁が行われたが、川俣ほどでは無かった(朝倉, 1968)。1980年現在、帝釈山系の三河沢、馬坂沢、無砂谷で3人が行っていたに過ぎない(斎藤, 1981b)。

V-2 牧場の設置と農外就労の増大

1) 牧場の設置と利用

栗山村には現在、村営の上栗山牧場、土呂部牧場、黒部牧場に加え、団体営の日蔭三本木牧場、三沢原牧場、土呂部牧場がある。村営牧場は山村振興法に関連した国営等草地開発附帯事業により国有地を借り受け、1971年着工、1974年完成をみた牧場である⁷⁾。それぞれの牧場面積は、46.7ha、25.0ha、28.0haであり、その70-80%が改良草地となっており、牧野管理農業協同組合によって運営されている。なお、これら牧場用地は、かつて国有林入会によって栗山村の人々が採草を行ってきたところでもあり、国有林を借り受けやすかったのであろう。また、これら牧場は年代的にみて夏ダイコン栽培

の進展による忌地現象の多発を回避するために導入された黒毛和牛の増大に伴って造成されたことが伺われる。一方、組合営の日蔭三本木牧場、上栗山三沢原牧場、土呂部牧場は、県営草地開発事業によりそれぞれ1960、1961、1982年に開場し、面積は61.5ha、56.5ha、12.0haで、それぞれの最寄集落によって管理されている。

これらの牧場のうち、土呂部集落が利用するのは、村営土呂部牧場、上栗山牧場および組合営の土呂部牧場、上栗山三沢原牧場で、1983年それぞれ50頭、12頭、12頭、34頭の合計108頭の黒毛和種が放牧されていた。村営上栗山牧場の場合、1983年の放牧料金は一日当たり成牛190円、育成牛50円であった。両者に格差があるのは成牛の場合、殆ど子牛を連れて放牧されるからである。黒部牧場は、主として村営上栗山、土呂部牧場で妊娠牛と確認された牝牛を放牧するところである。もちろん、牧場には上栗山、日蔭集落の和牛も放牧されるので、上栗山、土呂部、上栗山三沢原牧場の放牧頭数は土呂部だけのものより多く、1983年それぞれ178頭、91頭、83頭であった。

2) 国有林利用の低下と農外就労の増大

国有林の一部が払い下げられ牧場に転換されたものの、高度経済成長期にかつて国有林を払い下げて行われた製炭業が衰退するとともに、土呂部を取り巻く国有林利用は低下した。一時、ブナ・ミズナラ等の落葉樹を活用したナメコやシイタケ栽培が行われたが、自給段階の域を出なかったため長く続かなかった。つまり、木挽き、製炭と長く続いた冬季間の国有林利用慣行は、僅かに梅雨時のサンショウウオ漁を残し、途絶えたといつてよい。したがって、製炭に代わる土呂部における最大の就労先は、農林業以外の人夫、日雇い等の仕事であった。

人夫、日雇い等の土方仕事は、かつて季節的な不安定就労であったが、ダム、道路、林道工事等の増大により通年化し、恒常的な安定就労となった。この人夫、日雇いには、40-50歳代の世帯主が従事し、同時に世帯主の妻も従事している場合が多い(第1表参照)。就業先は主として黒部など栗山村内の建設会社であるが、今市市の建設会社に通勤する者も現れてきた。一方、後継者においては農外就労の通年化が一般的となった。中学、高校卒業後、かつて就業機会の多い宇都宮や今市市へ転出してしまふ場合が多かったので、土呂部では世帯主の子供のうち少なくとも一人が今市や鹿沼市で独立した世帯を設けている場合が多い。しかし、現在では交通事情の改善により今市市まで通勤可能となったため、20歳代の若者でも土呂部に留まるものが生じてきた。村役場、林業公社黒部木工所など村内における安定就労の増大等が寄与しているのであろう。

VI 資源利用と生活空間の変化——むすびにかえて——

栗山村土呂部における土地・山林資源の利用は、宮城県鳴子町鬼首で認められたように(吉田他、1957)、集落を中核として、それを順次耕地、採草地、私有林(割山)、国有林が取り巻く同心円構造を示していた。それぞれの利用状況の有機的関連をみると、土呂部の生活空間の変化は、大きく3つの時期に区分されよう。それぞれの時期の期間と特徴は以下のように要約される。

第Ⅰ期は、江戸時代から昭和初期までの期間である。この時期、北上山地での2年3作に類似したバレイシヨ-夏ソバーヒエ-オオムギー秋ソバという3年5作の自給的穀菽農業と明治初期に国有地

へ編入された林内での木挽き、ツグミ・アトリ猟が組み合わせられた生業が盛んに行われた時期である。堆厩肥を畑に投入し、木挽きした木工品を交易所まで運搬するために、馬が各農家で1-2頭飼育され、馬の飼料の生産のために採草地の利用も活発であった。内厩をもった茅葺直屋には雑穀を調理する囲炉裏を中心に、夜なべ仕事をする土間が広くとってあった。このように集落、耕域、共有地、国有林という空間的配置とその利用が季節的・有機的に結合していた。

ついで、第Ⅱ期は、集落の空間構成の基本的枠組みは変わらないものの、木挽きに代わって国有林製炭が重要な生業となった時期である。木炭生産は、土呂部ではすでに大正期に始まっていたが、それは国有林を払い下げた土呂部の人々が栗山村以外の人(焼き)に歩合制で焼かせていたものであった。当時、土呂部の人々は、自動車道までの木炭運搬に従事し、直接製炭し始めるのは1935年頃であった。輸送手段として馬が重要であり、採草地は馬の飼料と炭俵の原料の調達地として必要不可欠なものであった。したがって、第Ⅱ期も集落、耕域、共有地、国有林の利用が空間的に若干狭くなったものの有機的に結合していたとみることができる。この時期は、土呂部の人々が製炭に従事した1935年頃からエネルギー革命が進行し、木炭生産が衰退する1960年頃までといえよう。

ツグミ・アトリ猟が細々と残存しつつも、木炭生産に代わる重要な国有林利用が無いまま、日本の高度経済成長とあいまって農外就労が増大したのが第Ⅲ期であり、1970年頃を境に前期、後期に区分されよう。農業労働力のはげきは、当初、人夫、日雇い等の不安定就労であったが、ダム、道路、林道工事の増大により、恒常的な就労となってきた。こうした農外就労の増大は、耕域をはじめ採草地・森林資源の利用を低下させた(前期)。しかし、商品作物としての夏ダイコンの導入は土呂部の山地資源の利用にとって重要な契機となった。ダイコンの連作障害を防ぐために導入されたエンバクは、すぐれた飼料として和牛生産の基盤となり、また堆厩肥はダイコン畑に投入され、和牛生産はダイコン栽培と有機的に結合した。和牛生産の増大はさらに、国有林内における村営牧場の開設、採草地利用の復活、耕域における畜舎の建設をもたらし、新しい集落、耕域、採草地、林地の有機的関係が生まれてきた(後期)。

ところで、共有地の分割は旧戸に厚く、新戸に薄く行われてきたので、現在の個々の農家の採草地と私有林の所有面積は、独立年代が新しくなるほど段階的に減少し、さらにそれはダイコンの栽培面積、和牛飼育頭数とよく対応している。このことは、農業経営に社会構造が反映されていることを示すとともに、土呂部におけるそれぞれの利用空間が強く結びついていることを示すものであろう。

現地調査にあたり、栗山村役場、土呂部集落の方々にお世話になった。なお、本稿の一部は、1884年度東北地理学会春季学術大会で発表した。本研究を進めるに際し、文部省科学研究費一般研究C「わが国における山地牧場の展開と利用態様の変化」(No.5958014, 研究代表者: 斎藤 功)、一般研究C「花卉・野菜の山上げ栽培と主産地形成に関する生態地理学的研究」(No.63580184, 研究代表者: 斎藤 功)を使用し、研究のまとめに際し、一般研究C「野菜F₁品種の空間的拡散に関する計量的・地域生態論的研究」(No.02680190, 研究代表者: 斎藤 功)の一部を使用した。また、製図は本学の宮坂和人氏にお世話になった。記して感謝いたします。

註

- 1) 土呂部の草分けの一人神山弥一氏からの聞きとりによる。
- 2) 蔓牛とは本来、中国山地で育種された足腰の強い多産系の農耕牛であり、神戸牛等の素牛となった(阿哲畜産農業協同組合連合会, 1955)。
- 3) 焼子は栃木県ばかりでなく、群馬県など県外の人もいた。焼子として土呂部に来て、そのまま住み着いたY氏の父は今市市の出身であったという。
- 4) 当時この地方ではツグミ類を総称してKrammetsvogel(杜松鳥)と呼んでいた。ツグミは9月から10月にかけての秋の飛来時に捕獲され、普通加工して食に付されたが、塩漬け貯蔵され冬季にも食された。1900年頃、Danziger Höhe地方では商取引の対象となり、主としてベルリンに移出されていたという。なお、堀内(1942)によれば、茨城の鹿島地方でも杜松の実を食べに飛来したツグミが捕獲されていたという。
- 5) 鳥屋場は、地図上で推定し、それを聞き取りで確認した。それを野鳥の会の人たちが調べた鳥屋場地図と重ねた結果、殆ど一致した。
- 6) ツグミの通過する朝晩の猟期中、網にかかるのはよくて100羽中1羽程度であり、一日の猟果は、一般に考えられているような一網打尽というわけには行かず、通常30羽程度であったという。
- 7) このようなことは、北上山地北部でも行われた(山本, 1986)。

引用文献

- 朝倉隆太郎(1968): 鬼怒川上流の山村とその姿容。青野寿郎・尾留川正平編『日本地誌, V』二宮書店, 595-600。
- 阿哲畜産農業協同組合連合会(1955): 『阿哲畜産史』阿哲畜産農業協同組合連合会, 327p。
- 池谷和信(1984): ダム建設により水没予定にある集落の変貌—新潟県三面におけるゼンマイ採集に着目して—。東北地理, 36, 91-104。
- 市川健夫(1984): 北上山地における伝統的ブナ帯農業。市川健夫・山本正三・齋藤 功編『日本のブナ帯文化』朝倉書店, 206-219。
- 市川健夫・齋藤 功(1979): 日本におけるブナ帯農耕文化試論。地理, 24(12), 84-102。
- 市川健夫・齋藤 功(1984): ブナ帯の狩猟と漁撈。『日本のブナ帯文化』朝倉書店, 84-104。
- 齋藤 功(1981a): 栃木県ブナ帯における夏野菜栽培の発展。お茶の水女子大学人文科学紀要, 34, 1-26。
- 齋藤 功(1981b): 帝釈山周辺のサンショウウオ漁について。科研費報告『ブナ帯における生活文化の生態地理学的研究』(代表 市川健夫), 173-178。
- 齋藤 功(1982): 日本における夏ダイコン生産の展開とブナ帯。筑波大学人文地理学研究, VI, 181-212。
- 齋藤 功(1984): ブナ帯における森林資源の利用。『日本のブナ帯文化』朝倉書店, 104-121。
- 田中館秀三・山口弥一郎(1936): 東北地方に於ける出作及び出稼集落の経済地理—福島県楡枝岐村の出作, 岩手県田山村の出稼—。地理学評論, 12, 218-247。
- 千葉徳爾(1969): 『狩猟伝承研究』風間書房, 828p。
- 栃木県教育委員会(1967): 『栗山の民俗』栃木県民俗資料調査書, 第2集, 149p。
- 中島弘二(1986): 背振山麓東背振山における伝統的環境利用—主体的環境区分をとおして—。人文地理, 38, 41-55。
- 日光高原野菜生産出荷組合協議会(1977): 日光高原野菜栽培20周年記念誌, 16p。
- 福宿光一(1969): 本邦における製炭期に関する地理学的研究。山梨大学教育学部紀要, 4, 11-50。
- 藤田佳久(1981): 『日本の山村』地人書房, 271p。
- 堀内讚位(1942): 『写真記録 日本鳥類狩猟法』三省堂, 66p。
- 山本 充(1986): 北上山地北部における有畜農業の展開と土地資源利用の変化。地理学評論, 59(Ser. A), 706-728。
- 吉田寛一, et al.(1957): 鬼首村の牧野利用に関する調査, 東北大学農学研究所彙報, 9(1), 1-126。
- 渡辺久雄(1977): 『木地師の世界』創元社, 201p。
- Penz, H.(1984): Moderne Wanderungen im Alpenen Bergbauerntum. Geographische Rundschau, 36, 404-408。
- Tolksdorf, V.(1976): Der Vogelfang in Ost- und Westpreussen. Jahrbuch für Ostdeutsche Volkskunde, 19, 299-305。

Spatial Changes of the Forest Resource Use in the Dorobu Settlement in Kuriyama-mura, Tochigi Prefecture

— An Example from Japanese Beech Forest Belt —

Isao SAITO and Mitsuru YAMAMOTO

Mountain village people generally utilize various resources of neighbouring forests for their subsistence because of the limited farmland acreage. This study examines the spatial changes of the forest resource use in beech forest mountains in Dorobu, a small mountain village located at 900m in altitudes in the northern part of Nikko, a famous tourist resort. The number of households of Dorobu settlement, which once reached 36, decreased into 9 because of a famine in the Edo era. It gradually increased in Meiji and Taisho periods into 17 and now into 30.

People of the village cultivated barley, millets (Japanese barnyard and foxtail millets), potatoes and buckwheat until the 1920s. In off-farming seasons they gathered various wood for fuels and tools, chestnuts, horse chestnuts and wild vegetables for their subsistence. They were also engaged in woodcraft, fishing and hunting for cash in order to make up the shortage of foodcrops. Around 1920 some of the people started commercial charcoal making, although other people continued to produce woodware. Handicraft for kitchen-ware (materials for round lunch boxes and small dining tables) were produced at small temporary huts in winter seasons. They used two or three horses for transporting the products.

People practiced hunting of such wildlife as deers, bears, flying squirrels, rabbits and martens. Catching such migratory birds as disked ouzels and mountain finches with bird-net were also common. Flocks of disked ouzels were caught by bird-nets, which were set at many cols of the surrounding mountain range from the middle of October to the middle of November. They earned a half-year livelihood by obtaining the game of one month. They domesticated male birds as decoys to lure the flocks.

They also practiced fishing of trout and bull trout in late springs, and caught salamanders of Hakone variety with receptacles made of bamboo in Baiu seasons. Smoked salamander were shipped to medical dealers of the city.

Radishes were introduced in the cropland around 1952. They were cultivated during summer when they enjoyed a good price at the Tokyo markets. The radishes also could grow fully in summer, although hot weather prohibited their cultivation in the lowland. However, the successive cropping of summer radishes caused the decrease in their productivity. In order to improve the inferior soil, the people started to input the manure of the cattle with black hair.

Increasing number of cattle keeping facilitated (1) the cultivation of rye for fodder after the harvest of summer radishes, (2) the revital utilization of grassland, which was once a communal land subdivided into individual plots, and (3) the establishment of the communal grazing land.

Bird-netting was prohibited officially, but continued imperceptibly until recently. Disappearance of woodcraft and charcoal making decreased the utilization of forest resources. Accordingly, many of the people got off-farm jobs in and around the village.

The utilization of natural resources formed a concentric pattern ; the settlement was sur-

rounded by cropland, grassland, private woodland and national forest in this order. The intensity of the resource use and the transformation of the space are divided into the following three stages.

An intensive use of natural resources characterized the first stage. Arable land for intensive cropping, grassland for manure and horse fodder and national forest for woodcraft-making and bird-netting were combined seasonally and organically to produce a mountain occupation system from the Edo era to the 1920s. Around 1930 to 1960 main occupation utilizing the national forest changed from woodcraft to charcoal making. In the postwar period, however, the utilization of arable land and grassland became more extensive, while that of forest resources has been reduced. The new combination of summer radish production and cattle breeding has created a revival utilization of arable and grassland after around the 1960s. But traditional bird-netting has disappeared with the increasing movements of wildlife conservation.

The major results observed in this village is common to the mountain settlements in the beech forest area in Japan.